

「高地文明」論にむけて—その覚え書き

山本紀夫
国立民族学博物館

高地とはどこか

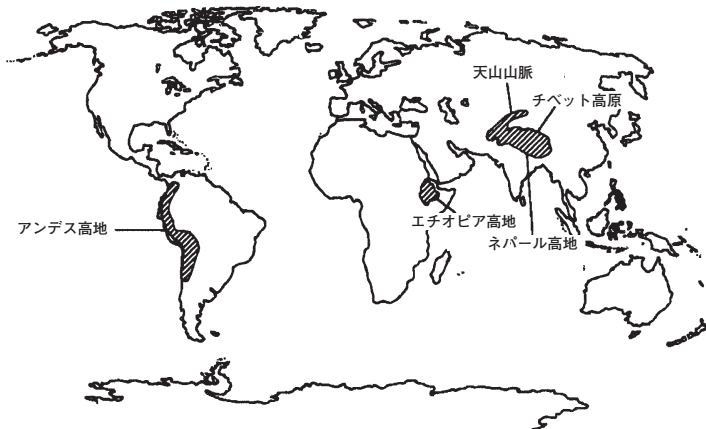
アンデス高地で調査を始めて40年近くになる。アンデスのあと比較のためにヒマラヤやチベット、さらにエチオピアなどでも調査を行ったが、それらもいずれも高地であった。わたしの最大の関心が、高地という環境と人間との関係を知ることであったからである。

さて、この高地とは具体的にはどれくらいの高度以上のところを指すのだろうか。じつは、高地という言葉は研究者によって様々な使い方がされている。たとえば、高地をもっとも低く使っている場合は標高約1000メートル以上のことであるが、もっとも高い場合は標高3000メートル以上のこともある。

しかし、人間にとって、ある程度以上の高度の変化は生理的な変化をともなう。すなわち、高度が上昇するにつれて気温が低くなるだけでなく、気圧も変化し、さらに酸素も希薄になってくるため、人間の身体も反応する。いわゆる高度反応

である。この高度反応が生じてくるのは一般に標高2500メートル以上とされていることから標高2500メートル以上のところを人間にとっての高地とする説が有力である(注1)。そこで、ここでもその例にならっておこう。図は標高2500メートル以上の高地で、しかもかなり大きな定住人口を擁する地域である。それによれば、アンデス高地、エチオピア高地、そして天山山脈からチベット高原を経てネパール・ヒマラヤにいたる地域が、人間にとっての世界の3大高地となる。ただし、この地図には示されていないものの、メキシコを含む中米の高地も多数の人口を擁するところである(注2)。

それでは、なぜ、これらの地域では高地に人が住むのだろうか。とくに、アンデスやチベットでは富士山の頂上くらいの高地でも多数の人が暮らしているが、このような高地での人びとの暮らしを可能にしているのは何だろうか。これについては1つのヒントがある。それは、上記の3地域は



地図 世界の3大高地 [Pawson & Jest 1978]

緯度の上ではかなり低いところ、つまり熱帯ないしは亜熱帯圏に位置していることである。つまり、熱帯ないしは亜熱帯に位置している地域だからこそ、これらの地域では高地であっても気候が比較的温暖なのである。

これは、日本のように高緯度に位置する国とくらべてみれば明らかである。高緯度地帯では明確な四季があり、冬には気温が低くなり、雪もしばしば降る。そのため、たとえば富士山の頂上あたりで1年を通して暮らすことは不可能になる。それに対して、緯度の低い地域では1年を通して気温の変化があまりなく、たとえば富士山の頂上ほどの高地であっても気候は意外に温暖であり、そこで暮らすことも可能なのである。

この点で先の3大高地のなかには少し例外的な地域もある。それがチベットである。チベットのなかには北緯30度以上の高緯度地帯もあるからだ。では、このような高緯度の高地でも多数の人たちが暮らしているのだろうか。これは私が長いあいだ疑問に思ってきたことであった。そして、その疑問は実際にチベット高原を歩いてみて氷解した。チベット高原のなかで多数の人たちが暮らすのはやはり緯度の低いところであり、そこはまた高度がやや低く標高4000メートル以下となっている。ところが、そこから緯度が高くなるにつれて標高の高い高原が広がり、そこでは人の影は薄く、やがて人口はきわめて希薄になるのである。

このチベットやエチオピアなどの高地を歩いてみて、熱帯高地に多くの人たちが暮らす理由がもう1つ存在することに気づいた。それは、これらの地

域の高地にはきわめて平坦な高原が広がっていることである。実際に、チベットもエチオピアの高地も、ふつう高原と表現されている。また、アンデスもエクアドルあたりからボリビアあたりにかけての高地部は平坦なところが多く、とくにティティカカ湖畔あたりには日本の本州がすっぽりおさまるほどの広大な高原が広がっている(写真1)。このような地形条件もまた高地部に人が多数暮らせる理由の1つのようなのである。これは、ネパール・ヒマラヤの例と比較してみれば明らかとなる。ネパール・ヒマラヤの地形は厳しく、傾斜が急で平坦地がほとんどない。そのため、集落はあっても、高地部での都市の発達が見られないのである。

高地適応型の暮らしの開発

それでは、このような気候や地形のおかげだけで先述した高地で人が暮らすことができるのだろうか。それについてはアンデスやヒマラヤで検討したことがあるが(注3)、他の地域でも高地に適した家畜や作物の存在、さらにこれらの家畜の飼育や栽培をもとにした暮らしが確立しているようだ。それをチベットを例として検討してみよう。

チベットを実際に訪れるまで、そこにわたしが抱いていたイメージは遊牧の世界であったが、そのイメージは現地を歩いてみて大きくくつがえされた。たしかに、ラサを北上すると草原におおわれたチャンタン高原が広がり、そこにはイメージ通りのヤクを遊牧する世界が展開されている。先述したように、そこが標高4000メートルをはるかに超す高地であり、また緯度も高くなっているからであろう。ところがチベット高原の南端を東西に流れるヤルツァンポー川流域を歩いてみてチベットの印象は大きく変わった。そこには穀倉地帯といってもよいほど耕地が連続し、豊かな緑でおおわれていたからである。そして、「畑のあるところ集落あり」といえるほど集落も多かったのである。

このヤルツァンポー川は、南緯30度以下(日本では奄美大島あたり)をほぼ東西に流れており、この緯度の低さも高地での農業を可能にする一因であろう。それに加えなければならないものがある。それが寒冷な高地でも栽培できる作物の存在である。アンデス高地ではジャガイモなどのイモ類の栽培化が人びとの暮らしを可能にしたが、チ



写真1. ティティカカ湖畔あたりには広大な高原が広がっている。

ベットでもやはりそのような作物が生み出されているのである。

その代表的な作物がオオムギの1品種であるチンコーである(写真2)。チンコーはチベット特有の品種であり、寒冷な高地でも栽培できることが知られる。もともと、オオムギはイランからトルコあたりにかけての中近東で紀元前7000年頃に栽培化された作物であるが、それが東に伝播してゆくなかで寒冷地に適した品種が生まれた。その1つがチンコーなのである。そのチンコーが、コムギとともに主作物としてヤルツァンポー川流域で栽培されている。チベットの降雨量が少ないため、ヤルツァンポー川から引いた水を利用して灌漑しているのである。

このヤルツァンポー川沿いでは灌漑ができないところでも作物の栽培が見られる。その代表的な作物がソバである(写真3)。ソバも四川省あたりの冷涼な高地が起源地とされ、そのおかげで寒冷なチベット高原でも栽培が可能なのである。

チベット高原の人々の暮らしを考える上で、もう1つ忘れてはならないことがある。それはヤクの家畜化である。ヤクの野生種はいまもチベット高原の一部地方に分布しており、ヤクが家畜化されたのはチベット高原であることが明かである。そのため、ヤクは低い気温、薄い酸素のところでも飼育が可能な動物である。そして、その毛は敷物や外套、さらにテント地に利用できる。また、その肉はしばしば干し肉として利用されるほか、乳からもミルク、チーズ、ヨーグルトがつくられ

る。さらに、荷物の輸送用としても重要である。

したがって、このヤクの家畜化がなければチベット高原の大半は人間にとってまったく利用できない不毛の地であったにちがいない。いいかえれば、ヤクの家畜化によってチベット高原の寒冷で広大な地域は人間が暮らすことが可能になったのである。ただし、先述したようにチベット高原のなかでも牧畜だけに依存している地域は人口密度がきわめて低い。人口密度が高く、都市などが見られるのは、チベット高原の南端に位置する農



写真3. チベット高原のソバ畑(標高約4000m)



写真2. チベット高原の代表的な作物のチンコー。ヤルツァンポー川流域にて。



写真4. ヤクの畜力による畑の耕起作業

耕地帯である。この農耕にもヤクの家畜化は大きな影響を与えたはずである。家畜の糞の肥料としての利用や畜力を使つての畑の耕起によって生産性を高めることができたと考えられるからである（写真4）（注4）。

もう1つの例—エチオピア高地

もう1つ、寒冷高地に適した暮らしを紹介しておこう。それはアフリカの例である。アフリカといえば、なんとなく気温が高く湿度も高く熱帯雨林におおわれているというイメージをわたしはもっていたが、このようなイメージは飛行機がエチオピアの首都のアジスアベバに近づくにつれて大きくくつがえされた。機内から見える光景が、ちょうどアンデスのエクアドルの高原のそれによく似ていたからである。それもそのはず、エチオピアとエクアドルはどちらも赤道直下に近く、しかも標高2000～3000メートルくらいの高原地帯が南北につづいている（写真5）。そして、そこでも農業がおこなわれているため景観がじつによく似ているのである。

さて、このエチオピアも、アビシニア高原の名で知られる高地に人口は集中している。そして、その背景にはやはり冷涼な気候でも栽培できる作物の開発があったと考えられる。エチオピアもアンデスなどと同じように多種多様な作物を生み出したところとして知られており、そのなかには冷涼な気候をもつ高原地帯で独自に誕生した作物があるからだ。

その代表的な作物が現地でテフと呼ばれている穀類である（写真6）。穀類とはいっても、テフの穀粒はきわめて小さく、その種子は150粒でやっとコムギ1粒の大きさに匹敵するといわれる。私もテフを初めてみたとき、「こんな小さな粒をつける植物がよく作物になったな」と驚いたほどであった。しかし、テフはエチオピア高地に住む人にとって食生活に欠かせないインジェラの原料であり、標高2800メートルあたりまで栽培可能な作物なのである。

もう1つエチオピア高地特有の作物がある。それはバショウ科に属し、一見するとバナナによく似ているのでニセバナナと呼ばれることもあるエンセーテである（写真7）。ただし、エンセーテは、バナナのように果実を食用とするのではなく、

その葉柄の基部に蓄えられる粗デンプンをかきとり、それを地中に埋めて発酵させる。これをエンセーテの葉でつつんで蒸し焼きにして食べるのである。この栽培の中心は標高2000メートル前後であるが、標高3000メートルあたりまでの高地でも栽培が可能とされる。そして、エンセーテの現在の栽培はエチオピアの西南部に集中しているが、かつてはエチオピア高地全域で栽培されていたとされるのである（注5）。

これらのテフおよびエンセーテはエチオピア高地で誕生し、現在も栽培がエチオピア高地に限られる作物であるが、少なくとももう1つエチオピア高地に古い時代に導入され、大きな影響を与えた作物がある。それはチベット高原でも広く栽培されているオオムギである。一説ではオオムギのエチオピアへの導入は今から5000～6000年前にさかのぼるとされ、現在はエチオピア独自の品種も多数生み出されている。

このエチオピア高地では農耕技術にも大きな特色がある。それは、エチオピア高地のどこに行ってもほとんど例外なく牛に引かせた犁で畑を耕すことである（写真8）。エチオピア研究者の重田真義（京都大学助教授）氏によれば、この牛耕は、西欧の植民地宗主国がサハラ以南のアフリカにもたらしたものと異なり、古くからエチオピア北部高地でおこなわれてきた在来の農耕技術であり、現在エチオピア高地全体に広がっているとされるものである（注6）。

それでは、なぜアフリカのなかでエチオピア高



写真5. アビシニア高原。標高2000m前後の高原が広がる。



写真6. テフと呼ばれるエチピア固有の穀類。カゼクサの仲間。



写真8. 牛に引かせた犁（アビシニア高原にて）



写真7. エンセーテ。バナナに似ているが、果実を利用するのではなく、葉柄の基部に蓄えられるデンプンを利用する。

地だけで牛耕がおこなわれているのだろうか。これも熱帯高地特有の環境と大きな関係があると私は考えている。熱帯高地特有の環境とは、標高の上昇とともに土壌が貧弱で脆弱になる傾向のあることである。そして、このような環境のなかで農業をつづけるためには家畜の糞尿を肥料として利用するなど、家畜飼育と作物栽培がむすびついた、いわゆる農牧複合的な暮らしが不可欠になる。実際に、そのような例を私はアンデスでも、ヒマラヤでも、そしてチベットなどの高地でも見てきたのである。

高地は健康地

このような寒冷高地に適した作物や家畜の誕生、そして、それらの作物や家畜をもとにした暮らしの成立のおかげでアンデスやチベット、そしてエチオピアなどの高地では多数の人たちが暮らすことになったのであろう。もちろん、先述したように、これらの地域には平坦な高原が多く、さらに気候が比較的温暖であるということも影響していたはずである。とにかく、この人口の増加に高地特有の条件が有効に働いたことが考えられる。この点については、なぜアンデスで人が高地に住むかという理由の1つとして、そこが伝染病などのない健康地であることを指摘したことがあるが（注7）、これは他の熱帯高地も同様のようである。

たとえば、ネパール・ヒマラヤの山麓地帯には

タイと呼ばれる熱帯低地が東西に広がっているが、そこはマラリアの発生地であり、人が住むには適さなかった。そのため、ネパール・ヒマラヤで人口が稠密な高度は標高1000～2000メートル前後に集中している。これはエチオピアも同じである。エチオピアも低地部はマラリアが発生する地域であり、そこでは集落があっても小さく、人口の大部分はやはり高地に集中しているのである。

この点から見れば、ペルー・アンデスの山麓地帯は少し特殊な地域である。アンデスの東側の山麓地帯は古くから人口が少なく、インカ帝国の時代もその勢力はあまり及ばなかったが、その反対側の太平洋に面した海岸地帯では古くから農耕が発達し、人口が多かったことが知られている。しかし、この海岸地帯の沖合にはフンボルトの寒流が流れており、緯度のわりに気温は意外に低い。実際に、私は海岸地帯にあるリマの町で暮らしたことがあるが、セーターなしではとても寒くて過ごせない季節さえあった。その状況をよく物語るように、ペルーの海岸地帯を北上し、沖合に寒流の流れていないエクアドルにまで入れば、そこにはマングローブが生い茂り、住む人も少ないのである。

こうしてみれば、熱帯高地で暮らすことに私たちはもっと積極的な価値を認めた方が良さそうである。医師であり登山家でもある松林公蔵氏（京都大学教授）も高所で暮らす利点について次のように述べている。

「高所では、疫病をもたらす媒介蚊などが生存しにくいだけでなく、疫病発生に必須の人口稠密性からまぬがれており、深い谷や湧き水は天然の上下水道ともなっており、病原菌の繁殖を結果的に抑制している。また峻険な自然条件で外界からの交通路が制限されているために外界からの人間を媒介としての疫病も流入しにくい」（注8）。

実際に、ペルー・アンデスではインカ帝国征服後、スペイン人がもたらした病気によって多数の人が死んだが、その大半は低地であり、高地での影響は比較的軽微なものであったことが知られているのである。

高地文明

このような特徴をもつ熱帯高地は、古くから高度な文明を生み出してきた。古代文明といえば一般的には大河の流域で生まれたとされ、それらは大河文明として知られているが、熱帯高地でも高地文明ともいえそうな文明が誕生しているのである。ここで疑問をもたれる方がおられるかもしれない。高地文明なんて聞いたことがない、そんな文明があったのか、と。

たしかに、これまで古代文明といえば、エジプト、メソポタミア、インダス、そして中国が世界の四大文明とされてきた。しかし、世界史的にみれば、このほかにも古代文明はあった。その代表的なものが、アメリカ大陸に栄えたメキシコ、マヤ、中央アンデスの文明である。ところが、これらの新大陸文明は従来の古代史のなかではほとんど無視されるか、あるいは例外的な存在として扱われてきた。これらの地域には大河がなく、大河文明ではないからかもしれない。

しかし、環境に注目して世界を見れば、大河の流域ではなく、高地で生まれた文明がいくつもありそうである。その代表的なものがアンデス文明である。アンデス文明でも乾燥した海岸地帯に河川の水を巧みに利用して灌漑農耕をおこなったことが知られているが、それがすべてではなかった。標高3000メートル以上の高原地帯でも特色のある農牧業を営み、文明を発達させてきた。その象徴的存在がインカ帝国である。インカ帝国の中心のクスコは標高約3400メートルの高地にありながら、20万もの大人口を擁する、当時南アメリカ最大の都市であった（写真9）。

メキシコの高地でも高地文明が生まれていた可能性がある。メキシコの中央高原は標高2000メートルあまりの高地に広がる高原であるが、そこでも紀元前後に巨大なピラミッドを建設したことで知られるテオティワカン文明が誕生している。テオティワカンは磐盤の目のような入念な都市計画が特徴で、そこに最盛期には6～8万人の人が居住したとされる（写真10）。また、このメキシコの中央高原では後にスペイン人たちによって滅亡させられたアステカ文明も発達した。

先に検討したチベットでも高地文明といえそうな文明を生み出している。有名なチベット文明である。チベット文明の先史時代については明らか



写真9. インカ帝国の中心であったクスコにある
サクサイワマンの城塞

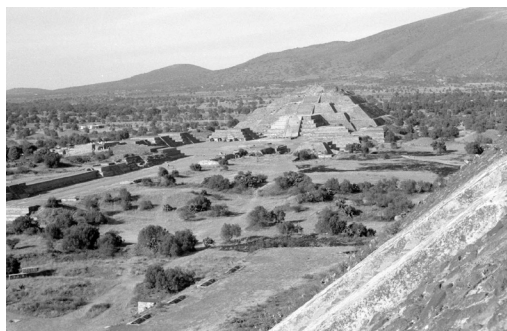


写真10. 標高2000メートルあまりのメキシコ中央高地に築かれたテオティワカンのピラミッド

になっていないが、伝承によれば最初のチベット人はヤルツァンポー川の南に位置するヤルン渓谷に住んでいたとされる。チベット研究者のスタンによれば、そこは「森に覆われた山国であり、比較的温暖で、農耕に適し」ており、この地方に最初の王権が誕生したとされる。そして、古代チベット人は、「北方の高地ステップにいてヤクや馬の飼育にあたる遊牧民についての観念とは異なり」、その生活の舞台は「鬱蒼とした森の上方の山の放牧地が想像され、森と放牧地の間を往来する人々の姿が浮かび上がる」としている（注9）。これは、ネパール東部のシェルパの人たちの暮らしを彷彿とさせるものである。その後、ヤルン

地方にチベット王朝があらわれるや、権力は急速に東北地方にも拡大し（7～8世紀頃）、チベット高原に割拠していた諸部族を統一して国を建てた。これが古代チベット王国の吐蕃である。1642年には、ダライ・ラマ5世がチベット全土を統一し、チベット文明は黄金時代を迎えることになる（写真11）。アンデスでインカ帝国が滅亡してから約100年後のことであった。とにかく、チベット文明も高地を舞台に発達した文明であることは間違いない。そして、私のみるところ、チベット文明の中核になった地域はチベット高原の南端部であり、そこは広義の意味で熱帯高地といえるところなのである。

もう1つ熱帯高地で生まれた文明を見ておこう。それはエチオピア高地で生まれた文明である。それを、ここではエチオピア文明と呼んでおこう。アフリカで生まれた文明といえばエジプト文明が有名であり、紀元前3000年頃にすでに都市文明が誕生している。それに比べればエチオピア文明の誕生は時代が新しいが、遅くとも紀元1世紀頃には王国が誕生していた。ときに帝国とも表現されるアクスム王国である。この王国がエチオピア北部の高原地帯に誕生し、その勢力がアビシニア高原はいうまでもなく、紅海をこえたアラビア半島にまで及んだのである。また、紀元3世紀頃には貨幣が造られ、エチオピア独自の文字も使われるようになった。このようなアクスム王国の繁栄を今も物語るのが古都のアクスムに残されている。それはオベリスクに似たステレ（石塔）である（写真12）。これがアクスムにいくつも現存しており、その最大のものは長さが33メートル、重さが50トンにおよぶ。その後、アクスム王国の勢力が衰退してからエチオピアの首都は南方のラリベラ、ゴンダール、そしてアジスアベバなどに変わったが、これらも標高2000メートル以上の高地に位置しているのである。

比較研究の視点を一むすびにかえて

以上、アンデス、メキシコ、チベット、エチオピアなどの高地で生まれた文明を高地文明と位置づけたが、これはまだ仮説の域ををえず、十分な検証は今後の課題である。そのような説をあえて提起したのはには理由がある。それは、これまでのようにアメリカ大陸で生まれた文明を無視したり、

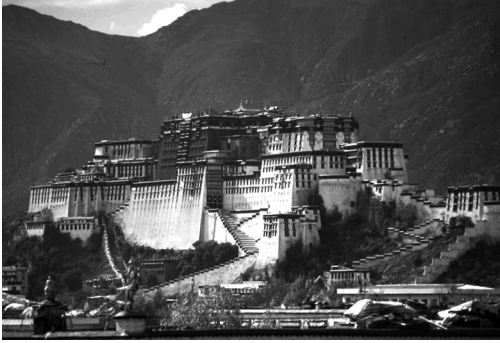


写真 11. チベット文明の華、ポタラ宮

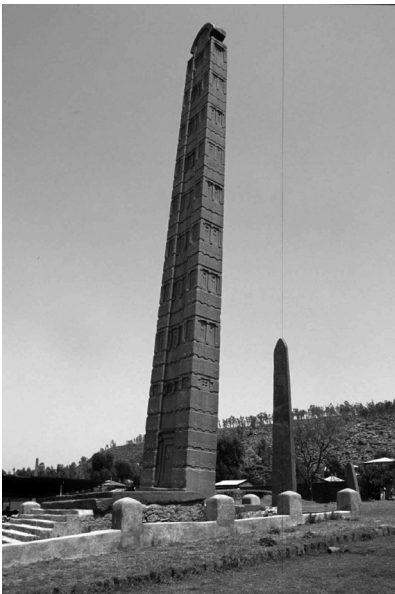


写真 12. アクスムに残されているステレ（石塔）

先述した四大文明の例外として扱うのではなく、同じような環境で生成した文明を比較することによって、それぞれの文明の特徴がもっと明らかになると考えたからである。同じような環境とは、熱帯ないしは亜熱帯に位置する高地である。

このように類似した環境で生まれた文明を比較すれば、そこには類似点が少なくないはずである。たとえば、類似点の1つに高地に独特の宗教もあげられそうである。それというのも、上記のうちの少なくとも3地域ではいずれも高地宗教とでも

呼べそうな宗教が発達したからである。すなわち、アンデス高地では太陽信仰、チベットではチベット仏教、そしてエチオピア高地でもアクスム王国時代にキリスト教が導入され、エチオピア正教として展開していった。興味深いことに、これらの宗教の影響が及んだ範囲も高地部に限定され、低地部にはほとんど広がらなかったことが知られている。このことから高地で暮らすことは人間の精神世界にも何らかの影響を与えているとみられ、それはまた文明の生成とも密接な関係をもちそうである。

とにかく、このような高地文明の類似点や違いを比較すれば、文明の本質について、さらには人間と環境との関係についても興味深い示唆が得られそうである。そして、このような研究を進める上で好都合なことがある。それは先述した熱帯高地には伝統的な文化や暮らしを守る先住民の人たちが多く住んでいることである。たとえば、ネパール・ヒマラヤの南面斜面を低地から登ってゆくと標高1000メートルをこえるあたりから様々な民族が暮らしているのに気づく。インド系やチベット系の諸民族である。そして、標高3000メートルあたりまで登ると、そこはチベット系民族の世界になっている。アンデスでもそうである。ペルー・アンデスなどでは海岸地帯は白人系の人たちが目立つのに、標高3000メートルあたりから上の山岳地帯ではケチュア族やアイマラ族の人たちの方が多くなっていく。エチオピアでも高地にはアム・ハラ系やティグレ系の民族が多数暮らしている。

このような先住民の人たちの暮らし、とくに農業や牧畜などの生業については人類学者などの調査のおかげでかなりの蓄積をみるようになっていく。しかし、それを地域ごとに見ていくのは各地域における環境と人間との関係の特色の把握は難しい。まして、これまでほとんど無視されていた高地文明については存在さえ気づかなかつたはずである。実際に、私自身もアンデス高地だけで調査をしていたときは高地文明の存在に気づかなかつた。その存在を知ったのは、アンデスのあと、ヒマラヤやチベット、そしてエチオピア高地を歩いてからのことであった。世界各地の高地を視野に入れた地域間比較研究は、今後の研究の大きな発展と広がりの可能性を雄弁に物語りそうである。

【付記】本稿は、次の拙著の終章を加筆、改稿したものである。

山本紀夫 『雲の上で暮らす—アンデス・ヒマラヤ高地民族の世界』 ナカニシヤ出版 2006年。

- (注1) Pawson, I.G. & Jest, C. The high-altitude areas of the world and their cultures. Baker, P.T. (ed.), The Biology of High-altitude Peoples, 17-45, 1978.
- (注2) メキシコの首都のメキシコ市は標高 2200メートルあまりの高地にあるが、そこだけでも人口は 1000万人を超している。
- (注3) 山本紀夫・稲村哲也編著『ヒマラヤの環境誌—山岳地域の自然とシェルパの世界—』 八坂書房、2000年、山本紀夫著『ジャガイモとインカ帝国』 東京大学出版会 2004年。
- (注4) 稲村哲也 「アンデス山脈とヒマラヤ・チベット山塊」 川田順造・大貫良夫編著『生態の地域史』 214-267頁、2000年。
- (注5) 重田眞義（京都大学助教授）氏のご教示による。
- (注6) 重田眞義 「熱帯アフリカ高地における栽培植物と環境利用—エチオピア高地を中心に—」 『熱帯研究』 5巻3・4合併号 151-160頁、1996年。
- (注7) 山本紀夫 『インカの末裔たち』 日本放送出版協会 1992年。
- (注8) 松林公蔵 「なぜ人は高地に暮らすか—人類進化と文明における医学的側面—」 梅棹忠夫・山本紀夫編著『山の世界—自然・文化・暮らし』 177-186頁、2004年。
- (注9) スタン、R.A. 『チベットの文化』（山口端鳳・定方昴訳） 岩波書店、1993年。